

## 【セッション2】パネルディスカッション

### ③高橋正泰評議員

日本経営学会から来ております高橋です。私のほうはパワーポイントとかは用意してなくて申し訳ないんですけど、お話だけさせていただきたいというふうに思います。

最初に、先ほどご質問がありましたので、先にご質問に答えてから、ちょっと私が思うコメントというか考えていたことを、まずは皆さんにお話をさせていただきたいなと思うんですが。

(\*AJBS とのジョイントの方向性についての質問があった)

AJBS の件で、AJBS は元の母体が AIB・国際ビジネス学会というのが世界的なものがあって、その中でまたジョイントで AJBS というような日本での国際ビジネスの学会ということで、毎年、アメリカと思うんですけど、AIB とジョイントでやっているというようなところで、国際的な交流をしているような学会です。その AJBS のセッションを見学会のほうでいただいて、見学会のほうで報告者を募っていますので、報告するというので、今年のニューオーリンズの大会から少し国際的なことを進めていくということで、企画をさせていただいたというのが、JABS とのジョイントの方向性ということになります。

この場合は日本経営学会のほうで報告者を募ってセレクトして、それで報告をしてもらうというようなプロセスをとっております。最初ですので、あまり応募者はなかったんですけども、一応 4 報告ということで、1 セッションにするか 2 セッションにするかという調整をしているところですけど、発信をしていきたいということが日本経営学会での議論しているところになります。

日本経営学会でもできるだけ国際化をしていきたいということなので、今年は 60 周年記念が日本経営学会であるんですけども、基調講演としては日本経営学会でもプレゼンをされているアドラー先生をお招きをして、講演をしていただくというようなことから、AOM とか、海外のヨーロッパのほうですとイーポスとかです。そういうところとジョイントでやっていければいいかなと思っているんですけど。

やはり英文のジャーナルを出すというのが非常に重要なことだと思うんですけども、学会のスタッフをつくって、人的交流を進めるというようなことも同時にやらないと、雑誌をせっかく出しても読んでもらえないとかいうのがありますので、そこはヨーロッパとも並行的に進めていくのが、一番ジャーナルとして成功するひとつの方法じゃないかな、というのがひとつ考えているところです。質問に対してはこれでよろしいですか。

私は今回のジャーナルの発行に関しまして少し考えているところを述べさせてもらいたいと思うんですが、これまで発刊のほう、「どういう体制で、どういうふうにしてやるか」という話をされてきたので、それはもう充分、先生方もご理解をされていると思うんですが、それとちょっと違って観点を考えて、「要するに、投稿する人がどういうふうにかえるのか」というようなところから少し話をさせていただきたいなというふうに思います。

質を上げるということは非常に重要なんですが、こちらのほうで「質を上げます、良い

査読者を付けて良い論文を載せます」と言っても、もともと論文を投稿してくる方の質が高くなくてはどうしようもないわけです。それをどういうふうにするか、というようなことも考えていかななくてはいけないんじゃないかなというふうに思います。

いわゆる日本人の日本語で書く論文と、それから英文で書く論文、やっぱり書き方が違うんです。ですので、それをうまくちゃんと理解してもらって、英文の国際標準ということになるかと思うんですけども、合うような書き方というのを学んでもらわないと、いくらその気を出してもすぐ戻ってきてリジェクトされます、そういうものをトレーニングするというのが必要じゃないかな、というふうに最近よく考えています。

いわゆる、いかにして投稿者が国際的に通用するようなレベルの論文を書いてもらうか、ということがまず学会としてもやらなくちゃいけないんじゃないかと思います。もちろん、日本の研究が世界に劣っているわけじゃなくて、世界的な理解のスタンダードと少しずれているところがあると思うんです。ですので、せっかく日本で高い研究をしても、書き方とか論文の発信の仕方とかによって、出さなきゃ知ってもらえないというふうなことがありますので、それをなんとかクリアしていくという方法を考えていく。

というのが同時に、学会がここにジャーナルを出すということと、もうひとつは、投稿していただく研究者の方の国際的なレベル、というよりそのフォーマットに合わせる、というような、そういうことを両方やっていかななくてはいけないのではないかなという気がします。

特に、これから日本の学会を背負っていただく若い Ph. D. の方とか、それから若い研究者の方に対しては、国際的に活躍してもらわなくちゃいけないわけですから、今、世界のスタンダードというのはどういうものなんだろうとか、それから世界の A 級ジャーナルに掲載できるようなレベルってどういうような書き方をすればいいとか、そういうことを学んでもらう必要があると思うんです。

メソドロジーは非常に日本の場合弱いんです。私もヨーロッパとかアメリカのほうに行っている先生方と話をしますが、若手研究者に対するメソドロジーの教育というんですか、そういうもののトレーニングを日本ではしていないです。少なくとも弱いところだと思うんです。もちろん日本の研究者は若い方で、優秀な方は独自にいろいろ海外に出られて、在学研究だとか雑誌に投稿するような形の中で、世界スタンダード、A 級雑誌に載せるようなレベルのものを書かれる方もいらっしゃるんですが、それは個別でやっているのであって、学会として少なくともサポートしてやるという、そういうことを今後考えていく必要があるんじゃないかなというふうな気がします。

ヨーロッパですと、私は最近 CMS 関係をやっているんですが、CMS 関係ですと、例えばイタリアの経営学会が主催している、ナポリなんです、カプリで毎年、サマースクールというのをやるんです。

何をやっているかと言うと、大体 30 人をセレクトしているんです、若手研究者、それから現地の学者です。合宿形式で泊まりこみで、A 級雑誌のエディターをしている先生と

か、各専門分野でトップの先生がいらして、トレーニングをずっと泊まりこみでやるわけです。どのようなメソドロジーで、どのような方法、どのようなふうにしたほうがいいんだろうか、というようなことをトレーニングするんです。そういうことをヨーロッパはやっているわけです。

それからオーストラリアのほうで言いますと、私の関係しているリクルーディンク系のフォーラムがあるんですが、世界で大体 12 大学です。毎年 12 月にはメルボルン大学かシドニー大学でやっているんですけども、ワークショップをやるわけです。毎年やっているわけじゃないんですが、どういうことをやっているかと言うと、やはり Ph.D. の学生とか、それから若い先生方に当然くるわけですけども、A 級雑誌に載せるにはどうすればよいかということをして 2 日間かけてやるんです。

具体的にどんなことをやるかと言うと、私がやっていたときには、C・C・ハーディーというメルボルンの先生なんですけども、彼女がイーゴスの A 級雑誌なんですけども、投稿して、それを雑誌に載せるためにはどのようなプロセスを経たのか、全部公開するんです。最初論文を出して、それに対してどういうコメントがきて、そのコメントをどういうふうにして修正して出して、またコメントがきて修正して出して、載りました。こうやって全部公開してやるわけです。

ただし、それをやるだけじゃなくて、まずブラインドにしておいて、その論文を出したんですけど、どこに査読者はコメントを付けてくるか、ということをやまずディスカッションさせるんです。そして実際にこういうコメントがきましたと。それに対してどういうふうに対処しました。またコメントがきます。そのときにコメントはどう付けますかとか、ということを実際にやらせながら、若い研究者の方に A 級雑誌に載せるためにどういうふうにするかということをしてトレーニングするわけです。

そういうようなことを、やはりこれから日本の学会関係もやっていかないと、世界的な研究のレベルでいくと置いていかれてしまう。せっかくいいものを持っているにも関わらず置いていかれてしまう、というようなことから、そういう教育という言い方も変なんですけども、そういう研究のやり方とか、ジャーナルにするやり方とか、そういうものを国際的にやることになったら、学ばなくちゃいけないんじゃないかな、というのが最近考えているところです。

ですから、特にジャーナルを出して読んでもらおうといっても、読んでもらえるわけでもないわけですから、やっぱり学会に実際に行って人的交流をするということも非常に必要だろうと、そういうふうに思います。

ちなみに、毎年アメリカ経営学会・AOM に行くんですけども、非常に残念なことに、日本の参加者は非常に少ないんです。アメリカ経営学会で大体 1 万人ぐらい毎年参加者がいるんですけど、プログラムがありまして、何人日本人が来ているのかというこれを見ますと、私どものグループを含めて 30 何人しかいないんです。1 万人参加者がいて日本人は 30 何人です。これでは、いくら国際化といってもダメなんです。積極的に出て行くという

その人的交流と、それからそのジャーナルの発信、というふたつのことを両方進めていかないと国際的なスタンダードについていけない、というようなことがあるんじゃないかなというふうに思います。そのためにどうすればいいんだろうか、というようなことを今後は考えていく必要があるんじゃないかなというふうに思います。

ですので、今言ったようなことを、先生方にも、今回の経営関連学会協議会のほうの英文のジャーナルを出される。非常にいいことですし意義のあることだと思いますが、それについての体制はうまくいっていると思うんですけど、じゃあ実際に応募してもらった研究者の論文をどういうふうにするのか。そんなことも考えていく必要があるんじゃないかな、というのがまず私がちょっと考えているところです。

もう 1 点は、各ジャーナルでいきますと、欧米なんかを見てみますと、特徴があります。例えばアメリカの経営学会で言うと、「AMJ」はこれは当然、定量化の基礎研究の論文が載る。それから同じように「AMR」、これは理論系の、というふうに特徴があるわけです。ですので、やはりどのような英文のジャーナルの特徴をもたせるか、ということもやっぱり重要な点じゃないかなと思うんです。

ですから、国際ジャーナルのほうに投稿する際も、エディターを見ながら、この雑誌はどのような研究メソッドロジーを重要視しているのか、とかいうのを見ないと、闇雲に出してもリジェクトされてしまうわけです。

例えば、私なんかだと定性型をやるわけですが、定性型の研究で定量型の研究の雑誌に出してもすぐに返ってきます。もうぼろぼろです。その代わり、違うところに出しますと高い評価をしてくれる、というのがありますので、雑誌自体の特徴というのをこれからどういうふうの持たせていくのか。特にそこはいろいろな分野の経営科学分野がありますので難しいかもしれませんが、例えば特集で、例えば定性型の研究を載せるとか、あるいは定量型の研究を載せるとかね、それから理論を載せるとか、そういうようなことを考えていく、というようなことがいいんじゃないかなというふうな気がします。

どうしてもわれわれというのは世界で勝負をするときに日本の独自のものを持っていくわけです。確かにそれはいいと思うんですが、それだけですと、やはりこれからの将来を考えていったときに、やはり不足だと思います。

ですので、要するに一般的な普遍的な社会科学のレベルで、どのくらいのレベルで話ができるのか。という日本にこだわったことだけでなく、さらに進んだふうに上げていくためにどうすればいいんだろうか、ということをして学会のジャーナルを通して、学会の先生方に検討していただいて、合うような研究の論文を、フォーマットに論文を出していただくというようなことを、どうやっていただけるかということをし少しこれからやっていったほうがいいんじゃないかな、というふうな気がします。

去年は経営学会でもワークショップをひとつ開かせていただいて、若手の研究者を集めて、どういうふうにしてその論文を書いたらいいのかとか、どのような学会の活動が必要なんだろうかというディスカッションをやったんです。今年もやる予定なんです、

非常に若い人に好評で、今までそういうふうにはやっていなかったと。啓発的なものが、さらに国際的な意欲というんですか、若い人たちの意欲が増すのではないかな、というような気がします。こういうことを考えていくと、やはり今回のジャーナルも非常に将来的にはいい結果を生むんじゃないかな、というような気がするんです。

それから、具体的にちょっと投稿規定のことについて話をさせていただきたいと思うんですが、最近、著作権等々がうるさくなっていますが、今回英文で出すということなんですけども、ひとつ問題が、二重投稿関係で出てきますと、例えば日本語で書いた論文を英文にしましたと、英語で翻訳しましたと。これはオリジナルの論文になるんですか、ならないんですか。そういう問題があるんです。

いろいろご意見があるらしいんですが、言語が違えば違う論文だとか認めてかいいとかいうことがあって、それをきちんと投稿規定でやっておいたほうがいいかな、というふうに思います。

もちろん各学会も認めて、過去の論文を英文にしますと全然問題ないと思うんですけど、個人的に例えば日本語で書いた論文を、全部英語に翻訳をして、他のところにも出すと。それも何も書かないで出してしまう、ということもあって、それもオリジナルと認めるかどうかという問題もありますので、これは両方のご意見があるようですから、やはり学会のほうとして「どういう方針で行くのか」というのを、きちんと投稿規定のところに書いておいたほうが今後のためにいいんじゃないかな、というような気がします。こんなところで意見を述べさせていただきました。